

2009年春期シンポジウム

フランス哲学の日本への受容——フランス的〈生の哲学〉と大正生命主義をめぐって

はじめに

杉山直樹

本シンポジウムは、「フランス哲学の日本への受容」という大きなテーマをひとまず引き受けつつ企画された。「受容」という問題系が一般に持つ哲学上の重要性に関して、ここで繰り返す必要はないだろう。どのような哲学思想も、受け継がれ、手渡され、受け取られることなしには歴史的に存在できない以上は、哲学史なき哲学、受容史なき哲学などはあり得ない。

とはいうものの、単に編年史的な通覧が問題なのではない。今回のシンポジウムはフランス哲学、中でも特に19世紀末からのいわゆる〈生の哲学〉——それを代表するのはもちろんベルクソンだが、そこにジャン＝マリー・ギュヨー、あるいはフイエその他の哲学者を加えてもよいはずだ——この思潮の受容を、ひとまず我々の歴史のある限定された時期に即して、扱うこととした。この選択には、大きく二つの意図が込められている。

副題に「大正生命主義」というタームを使用させていただいたが、これは提題者の一人となる鈴木貞美氏が90年代初頭に主題化し展開させた概念である。大正期を中心として文化史・文学史のみならず社会思想や政治思想にも広く目配りを行うことを可能にするこのタームは、同時にまた、1970年以降に現れてくるある種の新しい「生命主義」の位置と価値を見積もるという現代的関心を託されたものでもあった。本シンポジウムも、こうした二重の関心を引き受けるものである。すなわち一つには当然ながら受容史的な考察——大正時代からその後、数多くの無惨な死を引き連れてくるあの時期において、我々がどのようにフランス的な〈生の哲学〉を受容していたのか、それがいかなる関心に駆動され、どのような効果を目指しつつ行われたものであったのか、そうした回顧が行われるだろう。そこから我々自身の過去についての、一つの肖像画が与えられてくるはずである。

そしてもう一つ——しかし以上の作業は、単に我々の色褪せた過去を描き出すばかりではないだろう。それ以後何が変わったのか、あるいは何が変わらぬままなのか。当時の受容で議論された論点はすべてその問題性を失ってしまったのか。〈生の哲学〉は、教科書的には、多かれ少なかれ非合理主義的で、また反科学主義的な性格を帯びたものとして19世紀後半に生じた一群の歴史的産物としてパッケージングされるが、しかし今日でも、「生/生命」あるいは好んで「いのち」とも記されるこの観念には、何か魔術的な、そして時には外見上のイノセンスなどからはほど遠い、危うさ込みでの独特の魅力と喚起力がそのままに残されているように見える。ベルクソンが、あるいはドゥルーズが読まれ続ける背景、今日も継続中のそうした「受容」の背後にも、多かれ少なかれ、広義の「生命主義」的な関心があると言っておそらく間違いにはなるまい。そして先の受容史的考察は、今日の我々の肖像を独特の角度からあらためて浮き彫りにしてくるものともなることだろう。言いかえれば、このシンポジウムのもう一つの目的は、系譜学的であれ考古学

的であれともかく、堅実かつ視野の広い「受容史」的諸考察から出発しながら、現在の我々の位置を確認し、さらにはそれを揺動させてみようというものであった。

以上の趣旨から、本シンポジウムでは鈴木貞美（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）、檜垣立哉（大阪大学）、宮山昌治（西安交通大学）の三氏に提題をお引き受けいただき、それぞれの観点から「大正生命主義」の周囲に組織されたフランス的〈生の哲学〉の活用や変貌、その評価について語っていただいた。ロゴスの他者としての「生命」、「生命」が孕む解消しがたい質料性の問題。一種実体化された「生命」概念に託された超越と内在との接続とその帰結。あるいは今日的な「生—政治」的問題への系譜学的問い、そして「生命」を挟む形で対峙する人間主義と非人間主義との関わり、等々…。三氏の提題が喚起した主題は多様であり、しかもそれぞれが我々を諸問題の極めてラディカルな水準へと一気に導くものであった。予定時間を大きく超過しながら活発に行われた討論は、提題そのものとあわせ、この「生命」概念の変わらぬ豊穡さと今日的な問題性をいっそう浮き彫りにした、と言ってよいだろう。哲学的な刺激に満ちた場を開いて下さった提題者の三氏、ならびに討議に参加された会員の方々に、あらためて感謝したい。